2019年２月10日（日）「神のものは神に」

マタイ 22:15-22

15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにイエスをことばのわなにかけようかと
相談した。 16 彼らはその弟子たちを、ヘロデ党の者たちといっしょにイエスのもとにやって、
こう言わせた。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれ
をもはばからない方だと存じています。あなたは、人の顔色を見られないからです。 17 それ
で、どう思われるのか言ってください。税金をカイザルに納めることは、律法にかなっている
ことでしょうか。かなっていないことでしょうか。」
18 イエスは彼らの悪意を知って言われた。「偽善者たち。なぜ、わたしをためすのか。 19
納め金にするお金をわたしに見せなさい。」そこで彼らは、デナリを一枚イエスのもとに持って
来た。 20 そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」 21 彼
らは、「カイザルのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものは
カイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」 22 彼らは、これを聞いて驚嘆し、
イエスを残して立ち去った。

【序論】

今日は「この世に生きる信仰者」としてのあり方を考えさせられる箇所です。パウロはキリスト者の国籍は天にあり（ピリピ 3:20)、もはやこの世のものではないと言います。ヘブル書では迫害に遭った信仰者について「この世は彼らにふさわしいところではなかった」（ヘブル 11:38）と語られています。私たちはイエス・キリストの救いにあずかった時から「神のもの」となりました。しかし、そうは言いながらも、私たちは現にこの世で生きているのであり、この世の何がしかの責任を担い、多くの恩恵にあずかりながら一生を歩みます。私たちは確かに、一面においてはこの世と自分とを分離しなくてはならない（ローマ 12:2)。しかし、同時に主イエスがなさったようにこの世を愛し（ヨハネ 3:16)、キリスト者としての責任を果たしていかなくてはなりません。これは「教会と国家」の問題、「宗教と政治」の問題に通じています。

【本論】

今日から22章の残りの部分、主イエスと敵対者たちとの四つの問答を学んでまいります。いずれもエルサレム神殿の中で起きた問答でしょう。

①帝国に納税すべきか（15-22 節）
②復活はあるか（23-31 節）
③どの戒めが一番重要か（34-40 節）
④ダビデの子であるメシヤはダビデの主ではないのか（41-46 節）
今日は第一の「税金問答」を扱います。

本論１．究極の選択

> **そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにイエスをことばのわなにかけようかと相談した。彼らはその弟子たちを、ヘロデ党の者たちといっしょにイエスのもとにやって、こう言わせた。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは、人の顔色を見られないからです。**
>
> （22:15-16）

ここではパリサイ人とヘロデ党の者が結託して主イエスに議論を吹っかけてきています。そもそもこの両者は正反対の考え方をしていた「水と油」の関係だったのです。パリサイ派はモーセ律法を厳格に守り、それゆえに異邦人の支配下に身を置くことは耐え難かった。なぜなら、申命記17:15で「**あなたの神、主の選ぶ者を、必ず、あなたの上に王として立てなければならない。あなたの同胞の中から、あなたの上に王を立てなければならない。同胞でない外国の人を、あなたの上に立てることはできない**」と言われているからです。反対に、ヘロデ党は親ローマ派で、ローマ帝国に忠義を尽くし、帝国に領主として立てられたヘロデ・アンティパスを支持し、ヘロデ王朝の再興を夢見ていました。以上のような両者の立場から、帝国に納める税金に関する考え方は相入れないものとならざるを得なかったのです。ところが、イエスを陥れるためとあらば敵同士が結びつく。「敵の敵は味方」といったところか。いえ、むしろ両方の立場を使ってイエスの逃げ道を塞ごうという魂胆でありましょう。

パリサイ人はここで、わざわざ弟子を遣わして質問をさせたと書かれています。これまでパリサイ派のお偉い方々はことごとく主イエスとの論争に敗れてきた。そこで、まだ顔の割れていない下っ端を使って、警戒心をなくさせ、油断したところで些細な言葉尻を捉えようとしたのでしょう。

この連中はお近づきのしるしに、まず主イエスを持ち上げるところから始めます。歯の浮くようなお世辞を並べ立てるのですが、皮肉なことに、その内容は主イエスの真実の姿を表している。敵対者すらも主イエスの正しい生き方を認めざるを得なかったのです。彼らの「イエス観」は以下の四つに集約されます。

①真実な方
②真理に基づいて神の道（倫理・生き方）を教えている
③誰をも憚らない
④人の顔色を見ない

まさしく人としてのあり方の模範、目標とも言える主イエスの人格がよくよく言い表されています。敵もそう認めざるを得ないほどに、主の生き方には一貫性があった。ところが、そのように述べた上で、彼らは練りに練った質問を投げかけてきました。

それで、どう思われるのか言ってください。税金をカイザルに納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」（22:17）

彼らが取り上げるのは「税金」の問題です。まず私たちは、自分自身の税金に対する感覚を考えてみたい。税金とは気持ちよく払える類のものであろうか。所得税、消費税、自動車税、都市民税、固定資産税…と様々な税金を私たちは日頃から払って生きておりますが、自分の稼ぎから一部を持っていかれる訳ですから、恐らく「払いたい」と思って払っている人はいないでしょう。

主イエスの時代、ローマ帝国の属州として総督の管轄下に置かれていたユダヤは、帝国への税金が義務化されていました。紀元６年に総督コポニウスがユダヤの地に着任してから、人頭税が課せられるようになったのです。ユダヤ人のすべての成人（男性は 14 歳以上、女性は 12 歳以上）が 65 歳になるまで頭割り（人数に応じて平等に割り当てる）に毎年納めさせられました。この徴税に先立ち、資料集めのために人口調査が行なわれましたが、あまりに苛酷だったため、民衆の強い反発を招き、ガリラヤのユダという人物が中心となって反乱を起こしました。もちろん、その反乱は鎮圧された訳ですが、言わば力でねじ伏せられたユダヤ人は泣く泣く支払いを余儀なくされた。それはまさに、政治的隷属の法的表現となったのです。

しかも、ローマ帝国内で使用されていた貨幣はローマ貨幣でありましたから、そのこともまたユダヤ人の心証を害するものであった。今日登場する「デナリ銀貨」には皇帝の肖像と共に、「「高貴なる神の子、皇帝にして大祭司なるティベリウス」という文字が刻み込まれており、その裏には皇帝の母リビアの像が描かれていました。十戒では像を造ることが禁じられていましたし、皇帝を「神の子」と呼ぶことはユダヤ人にとって耐え難いことでしたから、そのコインを使用して税金を支払うということは、宗教的逸脱に感じられたのです。少し感覚は違うかも知れませんが、東伏見駅から稲荷神社までの通りには巨大な鳥居が二つ設置されていて、通行人は否応なしにその下を潜ることになります。引っ越してきた当初、私は随分と心に引っかかるものを感じたものでした。

「カイザルに税金を納めることは、律法に適っているか否か」という敵対者たちの問

いは、純粋に分からないことを主に教えていただこうというものではありません。彼らの中には最初から既に答えがある。パリサイ人の答えは「否」。ヘロデ党の答えは「是」です。彼らはあくまでもイエスの立場を壊すことを目的として、このような厄介な質問を考え出したのです。もし主イエスが「税金は払うべきだ」と答えたなら、これまで主イエスにイスラエル復興の期待をかけてきた多くの支持者が離れていくことになるでしょう。彼らはイエスを王に立て、ローマ帝国を打ち破ってほしかった。その中にはもちろん帝国への税金制度の打破も含まれていたのです。しかし、もし主イエスが「税金は払うべきではない」と答えたならば、パリサイ人は喜ぶとしても、帝国への反乱を首謀者したとして訴える口実ができる。恐らく、この敵対者たちは、イエスが「税金は払うべきではない」という立場を採ることを予想していたと思われます。と申しますのは、紀元６年に反乱を起こしたガリラヤのユダを皮切りに、ガリラヤ地方全体に打倒ローマ帝国の空気が渦巻いていたからです。イエスもその男の一人に違いない。そのような位置付けができれば、訴えるのは簡単だった。事実、総督ピラトの面前における十字架裁判の場面で、偽りの証言者がこんなことを言っているのです。

> **そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、<u>カイザルに税金を納めることを禁じ</u>、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」**
>
> （ルカ 23:2）

つまり、カイザルに税金を納めるか否かは、ローマ帝国に従うかどうかを判断する決定的なポイントだったのです。

<u>本論２．カイザルのものはカイザルに、神のものは神に</u>

主イエスは敵対者たちの質問の動機を見抜き、お答えになります。

> **イエスは彼らの悪意を知って言われた。「偽善者たち。なぜ、わたしをためすのか。納め金にするお金をわたしに見せなさい。」そこで彼らは、デナリを一枚イエスのもとに持って来た。**（22:18-19）

主はここで敢えて彼らにデナリ銀貨を持って来させます。通常、ユダヤ人は神殿内にローマのコインを持ち込まなかったそうですが、誰かが持っていたのでしょう。彼らがそれを持っているという時点で、そこには重大な事実が確認されます。それは、ユダヤを現に支配しているのはカイザルであるということです。そして、実際に帝国内で流通している貨幣を用いて、ユダヤ人は嫌々であろうが何であろうが生活をしているという事実です。主はまずそのことを彼らに認識させました。

私たちも海外に行った際には、その国の流通貨幣を使わなければ生きていくことはで

きません。アメリカで「私は絶対に円を使う！」と主張しても、それでは買い物はできないのです。つまり、この世の王の下にあっては、その支配権に従わなければ、誰も世を渡り歩くことはできないということになるでしょう。

そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは、「カイザルのです」と言った。（22:20-21a）

主は畳み掛けるように問いかけます。そのコインに描かれている肖像と銘は誰のものか。つまり、今現在あなたがたを支配しているのは誰か。その質問に対しては、敵対者も「カイザル」としか答えようがありません。嫌でも事実を認めさせる。既にこの時点で主は議論に勝っておられるのです。しかし、主は論争の勝敗にこだわっておられるのではない。ここから信仰者がこの世を歩むための深遠なる奥義を教えていかれます。私たちも耳を済ませてこの真理を聞き取りましょう。

「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」（22:21b）

「**カイザルのものはカイザルに**」とはどういう意味でしょうか。これは、<u>カイザルの政治的／経済的支配下に置かれているという事実を認めて生きよ</u>という意味です。カイザルが支給した貨幣、これがカイザルの支配を表しているのであれば、それに抵抗することなく、粛々と義務を果たすべきだと主は言われたのです。なぜなら、この世の権威は神によって立てられているからです。これについて、パウロもペテロも異口同音に後の信者に教えています。

- **人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。**（ローマ 13:1）
- **人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行う者を罰し、善を行う者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。**（Ⅰペテロ 2:13-14）

実は、旧約聖書でもエレミヤが同様の教えを説いています。バビロン捕囚の只中にある民に向けて語った言葉。

しかし、バビロンの王のくびきに首を差し出して彼に仕える民を、わたしはその土地にいこわせる。--主の御告げ--こうして、その土地を耕し、その中に住む。』」ユダの王ゼデキヤにも、私はこのことばのとおりに語って言った。「あなたがたはバビロンの王のくびきに首を差し出し、彼とその民に仕えて生きよ。（エレミヤ27:11-12）

捕囚という現実を受け入れられず、バビロニア帝国への反乱を企てようとする者に対し、エレミヤは神の御心とはそうではなく、支配者の手の中で神の民は忠実に歩むべきことを教えているのです。これは一見支配に隷属することのように見えるかも知れません。

しかし、聖書の教えは一貫して、私たちが国家に仕えることとは、その国家をお立てになった神に仕えることなのだと教えています。ゆえに、税金は神に支払う気持ちで、ある意味で喜びつつ納めていくのがキリスト者の生き方なのです。そして、私たちはこの税金によって国が支えられ、私たちが安全に生きていくための整備がなされていることを忘れてはならないでしょう。

最後に、主が語られたもう一つの教え「神のものは神に」を学んでまとめます。後ろに置かれたこの教えは、前の教えをはるかに凌駕する重要性を持つ。これは恐らく、私たち人間が自分という存在を神にお返しすべきであるということが言われているのでしょう。ローマのコインに皇帝の肖像が描かれていたように、人間という存在には「神の像（かたち）」が刻まれている。

> **神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。**（創世記 1:27）

神と同じように人格を持ち、愛の交流を求める存在として、人間は造られました。また、万物を統治する神に似せて、世を管理する者としても造られています。しかし、人は罪によって、神を神とすることなく、偽りの管理者として、あくまで自己中心的な世界を築き上げてきました。神を礼拝することを第一とせよと主は戒めの中で語っておられます。しかし、人は自分を第一とし、礼拝は第二としたがるのです。私たちは神のものを盗んではいないか。この存在を賭けて神を愛し、神に従う生き方をしようとしているか。神は徴税人のように強制的に徴税するということはなさいません。あくまでも私たちの自由意志に任せておられます。私たちはそれに甘んじて、神への負債（自分自身をあらゆる面でささげる）ということを怠っては来なかっただろうか。この絶え間のない自己吟味によって、私たちは真に神の子としてこの世を生きることができるようになるでしょう。

【結論】

今日は国民としての義務／神の民としての義務について語らせていただきました。しかし、これらは分けて考えるべきものではなく、神に対する義務によって、この世に対する義務もまた覆われているということを覚えたいと思います。なぜなら、この世の究極的な支配者は主イエス・キリストだからです。この方が再臨される時、すべての国家も主こそ王であることを知るでしょう。私たちは既にそのことを知りながら、主に仕え、国に仕えているということを心に留め、堂々とこの人生を歩み抜きたいと思います。

【祈り】

　主の主、王の王であられるイエス・キリストの父なる神様。御名が崇められますように。私たちはこの世に生きている限り、この世に対する義務を負っています。しかし、それと同時に、いえ、それ以上に、今は神の民としてあなたに対する責任を担う存在です。私たちは生まれながらにして自分が神に対する義務を負う存在だということを知らずに生きていました。しかし、贖われ、神に造られた者としての本来の生き方を取り戻しつつあります。そのような歩みの中、再び自分の人生を自分のものとしたくなる誘惑に晒されることがあります。主よ、すべてのものを与えてくださっているのはあなたであるという認識に常に立たせてください。そして、あなたに信頼して生きるところに、すべてのものが備えられるという約束を、この目で見させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
この世にご自身の支配をもたらすため、あらゆる国家を立て給うた、父なる神の愛。
神の民に、権力に従うことを求め、それを通して神に従う道を教え給う、主イエス・キリストの恵み。
自分という存在を神にささげ、被造物としての義務を喜んで果たさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。